

西表島祖納・星立の節祭

當間一郎

1、はじめに

沖縄の各地には、年間を通して多くの祭りが実施されている。今日では、以前といふらか変化してきているが、中心部分を大切に行いながら、継続されている。

沖縄本島北部では、国頭村字安田に継承されているシヌグ、国頭村字比地に伝わるウンジャミ、大宜味村字塩屋のウンジャミ等が、多くの人たちに知られており、沖縄本島南部の知念村字久高のイザイホー（平成2年は中止になる。それ以前の昭和53年。昭和41年、昭和29年は実施）も、よく知られている。宮古本島では、ウヤガン、ミヤークヅツ、ンナフカ、ユーケイ、ヤーマスプナカ等、多良間島のスツウプナカ、八月踊り等、八重山諸島のプーリイ、タントウイ、キツガン、マユンガナシ、ドナンマツリ、シイチイ等は、地域を代表する祭りである。それに沖縄全域に見られる綱引、ハーリー等、沖縄の歴史と文化をはぐくみ、そして地域性豊かな祭りが多く存在している。

これらの祭りのもつ意義は大きい。沖縄は農耕社会が長く続き、永々と繁栄してきたので、農作儀礼を強力につつみこんだ祭りが多い。山の幸・海の幸に感謝し、村落共同体構成員の健康を喜びあうことを内容とするのが多い。過去一年間豊穣であり、健康で過ごせたことへの感謝を、全面に打ち出しての喜びの行事が、祈りをともない、敬虔かつにぎにぎしく行われるのである。

沖縄の祭りを見ながら思うことは、心をこめて感謝、祈りの部分を、ノロやツカサ、そして両者を支える女性祭祀者たちが、いちばん取り組んでいる姿のすばらしいことである。本土各県の祭りを、テレビ等で見ていると、すべて男の神職、つまり神社の神主等がつとめているのに対して、沖縄では、古代から琉球王国時代、そして今日まで女性司祭者が懸命に神事をとり行なって、五穀豊穣と村落共同体構成員の健康をかちとってきたのである。この祭りの形態が、沖縄の文化の特質にもなっているように思われてならない。

今回、とりあげる西表島祖納と星立（干立）^{シイチイ}の節祭は、1972・3年（昭和47・8）に調査して以来、20数年を経ている。祖納、星立のムラのたたずまいにも、世を迎える格好な地にあり、海のかなたから豊かな幸が届きやすい向きにもなっている。以前は、今日のような護岸はなく、白砂が風により動くごとに、美しい砂浜をみせてくれる。世の寄りやすいムラへの境界であった。

しかし、近年、海岸線が護岸で整備されて、海から直接に押し寄せる大きな波を、せきとめる形になってしまった。とくに、祖納の前泊海岸は、立派に整備されて、マルマボンサンからのムラへのはいりが、強力な形でせきとめられる形になってしまった。そのような状況の中で、祖納や星立の節（シイティ）は、毎年、行なわれてきている。

私は、第1回調査の報告を「西表島祖納の節祭り」として、1974年（昭和49）6月1日発行の『カラー沖縄のまつり』（月刊沖縄社）の21ページから26ページに掲載した。その時のカラー写真担当は、フリーカメラマンの友利安徳氏であった。その後も何回か両ムラの節（シイティ）を見に行つた。

毎年、3日間の盛大な祭りで、第1日目はトゥシイヌユー（平成10年10月17日付の「お知らせ」には、「19日、シチ（年の夜）、公民館作業」とあり、保存会報告書には「家庭行事」と明記されていた）、第2日目は世乞い（平成10年10月17日付の「お知らせ」には、「20日、世乞い」とある。世願いともいう。比嘉盛章氏が1940年に『南島』1に書いた論文（後述）には、「節踊」とある）、第3日目は、以前にはトドメ（止留式）と聞いたが、西表民俗芸能保存会報告には、「カラクセ」、（平成10年10月17日付の「お知らせ」には「21日、大平井戸儀式」とある。）、1940年の比嘉盛章氏の論文には「トドメ（止留式）」とあるといわれて、3日間の感謝行事である。

西表島の祖納、星立のシイティについての調査報告や考察等は多い。前述した沖縄の代表的な祭りについての学会報告は多いが、なかでも、西表島の両字のシイティの取材は、研究者やカメラマン等の記録が多い。研究者による調査報告、考察の代表的なものを列記する。それらの報告書等からも大いに学び、参考にしたことを記しておく。

古い報告、考察としては、前記した比嘉盛章氏の「西表の節祭とアンガマ踊」（『南島』1、1940年8月、台北南島発行所）があり、喜舎場永珣氏の「節祭に関する記録と古謡（祖納）」（『八重山古謡』（下）所収、1970年9月、沖縄タイムス社）がある。そして近年では、石垣博孝氏の「西表租納のシイティ（節祭）」（『八重山文化』第2号、1974年12月、東京八重山文化協会）、石垣博孝氏の「西表干立村のシイティ（節祭）」（『琉大史学』第8号、1976年2月、琉球大学史学会）、石垣博孝氏の「西表租納村のシイティ（節祭）」（『石垣市立八重山博物館々報』創刊号、1977年3月）、石垣博孝氏の「西表島の節祭」（『奄美沖縄民間文芸研究』第21号、1998年7月、奄美沖縄民間文芸研究会）がある。

なお、地元では、1978年（昭和53）に『国選択無形民俗文化財記録作成西表島租納星立の節祭の芸能』（1979年2月、西表民俗芸能保存会<会長那根武>が発行されている。その他にも、多くの研究者が現地へはいり、報告していることを記しておく。

2. シイチイ 節祭のはじまりと背景

「シイチイ（節祭り）」については、1713年に首里王府で編纂された『琉球国由来記』卷21の「年中祭〔祀之〕事」に、次のように記されている。

七八月中に己亥日節ノ事

由來。年帰シトテ、家中掃除、家蔵辻迄改メ。諸道具至迄洗拵、皆々年縄ヲ引キ、三日遊ビ申也。

また、1731年に首里王府で編纂された『琉球国旧記』附卷之11の「風俗」には、次のように記されている。

八月

毎年。七八月間。八重山人民。謹己亥日。盡掃_ニ房屋_ニ。並洗_ニ去諸器塵埃_ニ。而三日為_ニ拔河戯而遊焉。

さらに、18世紀初期にまとめられた『八重山諸記帳』の「島中旧式」に、次のように記されている。

七八月中己亥日節仕候是は年迎として家内外掃除仕家蔵之辻を改芝を結若水を取浴申候也

この3点の文献の記録から見ると、古くから西表島では、シイチイ（節祭り）が行われていたことはよくわかる。しかし、それがいつごろかということになると、上限がはっきりしない。前述の比嘉盛章氏の「西表の節祭とアンガマ踊」では、次のように述べている。

伝説によれば節祭は西表の開祖たる、慶来慶田城用緒と云ふ人が創始したものである。思ふに創始と云ふのは恐らく誤伝であらうが、少なくとも慶来慶田城といふ人が幾多の改善を加へたことは事実であらう。慶田城家の系譜によれば初代用緒と、2代用庶の生死年月日は不明となつてゐるが、3代目用尊以下の生死年月日は明白に記載されてゐる（慶来慶田城由来記参照）。今3代目用尊の生年を起算点として慶田城家の世代数で割つて見れば、慶田城家の1世代は平均32年余になる。これによつて溯ると、初代用緒は、今から470～480年頃に活躍した人物と推定される。曾つて喜舎場永珣氏が慶来慶田城は長祿元年の生れであると考証されたが、それは大体に於いて当つてゐると思ふ。果して然らば西表現存の節祭は470～480年来の伝統であると云へるが、その歌謡などから考へて見ても、それは500年以前のものであつても、決してそれ以後のものではないと思はれるのである。

比嘉氏の確かな起算論といえよう。1940年時点での考察であるので、それから60年余を加えて考えることが必要であろう。

那根武氏（西表民俗芸能保存会会长）は、『西表島租納・星立の節祭の芸能』（1979、2月）で、「5芸能の由来」として、次のように述べている。

今から約500年前から西表島の租納部落に節祭が伝承保存され、この節祭は農作物の豊作に感謝を捧げ、来年の五穀豊穣と住民の健康と繁栄を、天地の神々に祈願をする古風な神儀式である。この節祭は西表の一ヶ年の諸々の行事を総合して租納部落の前泊海岸、当日々この浜を“船元の御座”と呼んで洗い清められた砂浜の上で節祭を挙行したのが、節祭の起源となっている。

この両者の起源は、年代的にはほぼ同時期をおさえている。比嘉盛章氏は、前述のあとに土地の古老たちの2・3の異なった考え方のあることを紹介している。その1つは、「節祭は今夏の豊作と民衆の幸福生活とを神に感謝し、更に翌年の豊作を祈願する神事である。故に節祭は又「結願」^{きちくわん}の祝をも云ふ。所謂結願とは従来の祈願を解き、更に祈願を掛けることがある」。その2つは、「節祭は下半年の『世乞ひ』である。新春二月に上半年の作物の豊穣を祈つた如く、八月に又下半年の世乞ひをなすのである。往古われわれは1年間に2度の正月を行ひ、2度年を取つたのである。節祭はその第2正月を迎へる意味である。故に俗間では節祭を「正月小」^{ショウゲツコトコ}と云ひ、癸亥の日を「年の夜」と呼び、翌日は早朝に「産水」^{すでみづ}を掬むのである」。

その3つは、「然かるに一方に於ては又云ふ。八九月の交に節祭を行ふのは海上遠くの蓬來郷から、ミロク世界報を招来する意味の一般的世乞ひである。それは必ずしも下半期の幸福生活とか或は来年の豊作を祈るとか、そんな特定的のものではない。節祭に特に「舟漕ぎ」が重視せらるるもの即ちこの故である。あの舟漕ぎは遠く海上から「うしま世」を乗せて来る意味である。」と紹介している。そして比嘉盛章氏は、「ここに於いて節祭の本質と由来が那辺にあるかは甚だ明瞭を欠き、今日の私達には何んとも判断のつき兼ねることである。」と結んでいる。

比嘉氏は、続けて沖縄本島の八九月に行なわれている祭りと比較して考察を深めている。それを紹介すると、次の通りである。

私が西表の節祭の踊を見たその場の感じを云ふならば、それは沖縄本島地方に於いても等しく八九月の交に行はれる、かの臼太鼓やシノグ踊によく似てゐる。就中、島尻那の南端なる摩文仁村字米須の八月遊びに一層よく似ている。その歌謡の曲節と云ひ、舞踊の形式と云ひ、両者はいみじくも相近似してゐる。但し摩文仁村の八月遊びには旗頭、獅子、ミルク等の出し物がなく、若い女性達が老人の指揮に従ひ、二重円陣の団体舞踊を演じてゐるのみであつた。そして又その演舞も月のない晩に暗いアシビナー（遊び庭の意）の隅で、コッソリと物静かに行はれてゐたやうに記憶する。然るに西表のそれは白昼に然かも全民衆の総出場の下に、極めて大規模に又可なり派手に行はれてゐる。即ちそのだし物も男子の舟漕ぎ、女子のアンガマの外に、ミロク踊、獅子舞、棒踊等があり、その行事の盛大さには格段の相違があるやうである。尤も旧暦八九月の交に、女性

を中心として臼太鼓やシノグ等の行はれることは、沖縄本島の田舎でも規模の相違こそあれ一般的である。思ふに西表の節祭を始め八重山地方の節祭は、沖縄本島の八月遊びと同系統に属する行事ではあるまいか。

長い引用になったが、この1940年代における比嘉氏の結論は、沖縄本島の臼太鼓やシノグ踊等と西表あるいは八重山各地の節祭とは、同系統であるということである。この比嘉氏の考察に対する賛成、あるいは反対論については、寡聞にして知らない。今日、糸満市字米須のウスデークは、ムラの女性たちによって継承され、普及がはかられているが、西表の節祭との「歌謡の曲節」「舞踊の形式」等については、比較考察は進んではいないといえる。比嘉氏のこの論文からすると、その当時も今日でも、シイティ（節祭）の3日間の内容と、とくに2日目「世乞い」の演目は、ごくわずかの出入りはあっても、大半は同じようだ。沖縄本島の八九月の「アシビ」との比較考察は、今後の課題といえよう。

西表のシイティ（節祭）の創始者について、慶来慶田城（用緒）とする説があるが、このことについても、比嘉氏は、異論をとなえている。すなわち「創始者を慶来慶田城となす説には多大の疑問が生ずることになる。蓋し沖縄本島の八月遊びは慶来慶田城の時代よりも遙かに上代から行はれ、決して室町末期以後のものではないと思はれるからである。ただ西表の節祭の形式が慶来慶田城の手により、創始に近い程の改竄が加へられたかも知れぬと云ふことは、彼の人物手腕力量から見て云ひ得る事であらう。」とのべている。そして、この件については、「後日更に研究してみることにして」と、節祭の諸行事紹介を行なっている。

喜舎場永珣氏は、「節祭に関する記録と古謡（租納）」の巻頭で、

「節祭」は古代沖縄のお正月に当たる。すなわち陰暦の八月であったと思われる。節祭のことを沖縄本島ではシバサシ（柴差祭）と称えていたが、そのわけは「シバ」と称する「ヤブニッティ」の枝を、ところによっては桑の枝に薄木^{ススキ}の穂を添えて軒に差し、宅地内の樹木や諸道具等にも「チカラ芝」等を添えて差したから「シバサシ祭」と称していた。八重山ではシティ（節）と称して1年中の年中行事のはじめ、すなわち正月と称していた。八重山最大の年中行事であった。早朝に水を汲んで甕に入れて庭に置き、これを浴みて「若返える」と称していた。あるいは「年をとる」とも称していた。年とは正月でもあり、あるいは五穀のよく実ること。後世になって年を世とも称して「世願い」ともいっていた。（後略）。

とのべている。喜舎場永珣氏は、1914年（大正3）の教職勤中に「爬竜船の競技」の「審判官」を命ぜられたと記している。そして総括として、節祭は「絢爛たる絵巻を見るかのようであった。」と述懐しておられる。

筆者は、この西表の節祭りは、かなり古くからの歴史のある伝統祭祀だと考えている。

西表の英雄であった慶来慶田城用緒が創始したと伝わる話は、大いに検討する必要があると思う。創始を地域の英雄等に結びつける話が多い。比嘉氏や喜舎場氏の見てきた内容をとりこんでの、今後の考察が大切であると考えている。

3、節祭の内容

今回の調査は、1998年と1999年の2回続けて行なった。その時の3日間の行事内容を紹介しておく。

第1日目 1998年（平成10）は、10月19日（旧暦8月29日）。1999年（平成11）は10月14日（旧暦9月6日）。この日をトゥシイヌユー（年の夜）という。また、ウブシクミ（大仕込み。最後のリハーサルであろう）ともいう。

各家では、屋敷の内外を掃除して、海岸に打ちあげられた小石（ザラングー。砂利。）をそれぞれに運んできて、屋敷にまき、玄関や一番座敷から順にまいて家内をきよめる。そしてシチカッチャー（テリハカニクサ）を山からとってきて、家の柱に結ぶ。また、農器具や家財道具、刳舟、門柱等にも結びつけ、魔除け祓いとする。なお、家の内外に小石（砂利）をまく時は、次の祓いのことばをのべる。

ムニガザリ（祓い＜清め＞のことば）

トドイ、ドードウ一

スナヌ、シクラ、ナナフキ、ヤーフキ、ウブパマ、ナガパマ、フキアギタル、ザラングーシ、キユヌキチニチ、ヤ、キユムバ

ヤナムヌヤ、フカナシ、ヤ、カザシ、ウチチキ、トーリ、トードウ

ああ尊し。海の底から七吹き、八吹き、大きい浜長い浜に吹きあげられた、小石（砂利）で今日の吉日、家を清めるから、悪いものは外に出し、家の神様は落ちついて下さい。ああ夢し。

（『西表島租納・星立の節祭の芸能』）

此ヌ屋敷内 悪ナムヌ シティムヌ

入ラシ給ンナ 家人衆ヌ健康 有ラシ 紿り（石垣博孝「西表島の節祭」）

なお、各家の主のことばとして、「ムリカザリ（家長のことば）」があることが、『西表島租納・星立の節祭の芸能』に紹介されている。

第2日目 1998年（平成10）は、10月20日（旧暦9月1日）。1999年（平成11）は、10月15日（旧暦9月7日）。この日を世乞い、世願いという。

1998年10月20日にくばられた「節祭（しちい）世乞い行事日程」には、次のように記録されている。

午前5時 1番ドラにて『世乞い吉日』の告示。

午前 7 時	2 番ドラ。朝作業にて旗頭（3 旗）をスリズに立てる。
10時50分	役持ち及び芸人全員スリズに集合。
11時40分	※スリズの儀式開始（船頭、ミルク、フダチイミの各組の順。）
11時50分	1 番旗出発。船頭は船元へつくと旗振りを伴い前泊穀御嶽へ参拝祈願。 ・船頭（マスサイ）、旗振り（供物）持参の事。
12時 5 分	2 番旗とミルク行列、3 番旗とアンガー行列の順序で出発。
12時30分	舟浮かべの儀式。1 番旗、2 番旗、3 番旗とも浜下り整列。 ※開会宣言。平成10年節祭世乞い行事の開会。
12時30分	1 番旗を先導にピヨーシ（ヤフヌ手）にて舟子入場。
12時40分	2 番旗にてミルク行列入場。船元の御座に着座。
12時50分	3 番旗にてアンガー行列入場。船元の御座に着座。
午後 1 時	※閉会式次第 全員ニライカナイへの礼拝、公民館長あいさつ。神司祭詞。
午後 1 時50分	ミルク神の座とうりむち。
午後 2 時	男子狂言並びに棒芸。
午後 2 時50分	座とうりむち（舞踊奉納）。 婦人アンガー（巻踊り）。
3 時15分	3 時45分 ※舟くいの儀式開始。船頭世乞い宣誓の辞。舟の抽選。
4 時35分	男子アンガー（舟子巻踊り）。
5 時	獅子舞い（清めの儀）。船頭祝賀の舞。
5 時10分	※閉会の辞。男子芸人全員整列。全員ガーリー。
5 時15分	ミルク節にて座立ち。1 番旗、2 番旗、3 番旗の順にてスリズへ。神司、チヂビ方は座とうずみ。館長謝礼の辞。 ※全員スリズ（公民館）の集合後、世乞い行事収納の儀をなす。

1999年10月15日にくばられた祖納の節祭（しちい）ユークイ行事日程」には、次の通りで進行した。

午前 5 時	1 番ドラにて「ユークイ吉日」告示。
午前 6 時	2 番ドラ、朝作業にて旗頭 3 旗をスリズに立てる。
午前 7 時40分	節祭役持ち及び芸人、スリズへ全員集合。
午前 8 時40分	スリズの儀式開始（船頭・ミリク・フダチミの順に）
午前 8 時50分	1 番旗（ガヒヤカシラ）スリズ出発・船頭・旗振り・船頭は船元へ着くと旗振りを伴い前泊穀御嶽へ参拝、ユークイの祈願。 ※船頭はマスサイ、旗振りは供え物を持参。

- 午前9時5分 2番旗（シバカキ）とミリク行列・3番旗（ナギナタ）とアンガーアー行列の順にスリズ出発。（約15分で船元へ至る）
 ※各御嶽神司・チヂビは船元の御座に着座・船頭旗振りは祈願を済まし舟浮かべの儀式に備える。
- 午前9時25分 舟浮かべの儀式（船頭、舟子全員）
- 一開会宣言—
- 午前9時30分 1番旗を先頭にヤクヌティーにて舟子、船頭入場。
- 午前9時40分 2番旗を先頭にミリク行列入場、船元の御座に着座する。
- 午前9時50分 3番旗を先頭にアンガーアー行列入場、船元の御座に着座する。
- 午前10時20分 ユークイ儀式（舟くい）開始。
 ※ひきつづき「舟くい」へとはいる。・総責任者の挨拶。
 ・舟子代表ユークイ宣言、舟子の抽選。
- 午前11時10分 開会式。ニライカナイへの礼拝。公民館長挨拶。神司祭祀。
- 12時(正午) ミリク神の座とうりむち。
- 12時30分 婦人アンガーアー巻踊り。
- 1時(午後) 男子狂言。ひきつづき棒芸。
- 1時50分 座とうりむち（船元の御座）
 ※奉納舞踊。
- 2時20分 男子舟子アンガーアー巻踊り。
- 2時40分 獅子舞（船元清めの儀式）。
- 2時50分 閉会挨拶（※男子芸人全員整列）。※ミリク神ミリク節にて立座ふ。
 ※1番旗を先頭にスリズへ帰る。芸人全員揃スリズの座とうずみ儀式をなす。
 ※神司・チヂビは船元の御座にて「座とうずみ」の儀式をなす。

2ヵ年の世乞い行事日程を見たが、干満による開始時刻の変更のみで、この日の順序は、ほぼ同じと見てよい。このプログラムで呼び方が以前と異なるのは、「シティのアンガーアー」が、「婦人アンガーアー」となっていることであろう。

スリズ（揃所＝公民館）での出発前の厳粛な儀式、スリズから前泊海岸の船元までの1番旗（旗頭の文字は「尊農」）のあとから舟子達が続く。船元に入場すると、舟子達による「ヤフヌティー」（櫂の手）の演技がある。1998年は8名ずつの2列に太鼓2人、2列の中に1人がはいっての勇壮な櫂さばきを見せる。(1999年は10名の2列であった)祖納が男子全員で演ずるのに対して、星立では女子も出て演技する。

「ヤフヌティー」が終ると、2番旗（旗頭の文字は「租納」）を先頭に、ミリクの行列が入

場する。その次に3番旗（なぎなた）を先頭にアンガーアーの行列が船元にはいり、船元は一段とにぎやかになる。2カ年とも好天気で、世を乞うのにふさわしい行列であった。全員が船元に至り、船元の座につく。すぐに舟浮かべの儀式がはじまる。2人の船頭の相図で舟下ろし（進水式）がある。

ヤフヌティが終ると、舟の抽選があり、各舟に船頭と舟子が乗りこむ。祈願舟クイがあつて、マルマボンサンを1周して、いよいよ勝負になる。舟漕ぎが終ると、桟敷席で伴の婦人たちがうたうミリク節にあわせて、ミリクが大団扇をゆっくりと動かしながら踊る。浜では、アンガーアーの踊りである。この踊りが祭りの中心になる踊りという。フダツミ2人を先頭に入場する。列の後尾には2人の音取りがいて、アンガーアー踊りをリードする。

2人のフダツミのコスチュームは、クバ笠をかぶり、その上から黒朝衣（チョキヌ）をかぶり、右手に扇子をとじたまま持つ。アンガーアーのコスチュームは、黒のステナに白のカカンを着、頭に長巾ながきーじをしめ、背中に長く垂らす。紅白のザイを持つ。アンガーアー踊りは2重の円をつくって行われる。内円はフダツミ2人と音取りの2人がはいり、外円はアンガーアー達がならび、美しい踊りを見せる。歌は「今日ぬ誇らしや」「五尺手拭」「ぐぐば」「舟」の4曲構成になっている。

次に、男子狂言が演じられる、まず「パチカイ」（早使い）が1人で演じられ、「ルッポー」「リッポー」「キッポー」と続く。いずれも大きな声で幸先きよいことばをのべる。その唱えや動きはたくましいかぎりであった。その後舟子達が旗頭をとりまき巻踊りがある。そして最後に船元を清める獅子舞がある。すべて演目が終ると、1番旗を先頭にスリズへ戻る。そして関係者全員でスリズの座とうずみの儀式を取りおこない、すべてを終了する。一方、神司やチヂビは船元の座で「座とうずみ」の儀式を行なう。

星立の3日間も祖納と同様の内容で展開する。すなわち、第1日目がツチノトヰ（己亥）でトウシイヌユー（年の夜）である。祖納と同様。各家では屋敷の内外を掃除して、海岸から砂利（小石）を運び、屋敷にまき、玄関から1番座、2番座と家内にまいて清める。シチカッチャ（テリハカニクサ）を家の内や農器具等に結び、魔除け（祓い）とする。お嶽ではチカサ（司）が清掃後にシチカッチャを柱や鳥居に結び、祈願をする。その夜は、スリズで明日使用する旗頭や獅子舞、ミリク面、オホホの面などを点検する。

第2日目は、カノエネ（庚子）で世乞いの日である。まず、ムトウ御嶽や星立御嶽等で祈願がある。その後に、前の浜でヤフヌティー（櫂の手）が、舟子達やアンガーアー達により行われる。前列がアンガーアー、後列が舟子という2列での櫂の演技である。ヤフヌティが終ると、舟を浮かべる。舟漕ぎは、2回行われる。（1998年10月20日の記録である）スリズから結願祭をやるとのアナウンスがあり、星立御嶽で「かぎやで風」、「ふたで村」、「干立トウバラーマ」の3曲が奉納された。

シイチイ
次に節祭の芸能として、「シイチイのアンガアー」や「早使い」、「川平早使い」、「牛追狂言」があり、「棒」が演じられた。少年2人の3尺棒、一般男子の6尺棒、ナギナタとカマ等、元気な棒であった。ミリクを先頭に袖持ち、ミリクヌファ、アンガアー、トウウチが続く。ミリク行列の最中にオホホが出て、大きな振舞いをし、人目をひく。ミリクの動きと対照的な動きを見せるオホホである。このオホホについて、星立に2、3のエピソードがあるが割愛する。最後は「獅子舞」で星立御嶽は清められた。2頭獅子でイビの前でチヂビから盃をいただき清め所作で、世乞い行事をした。

なお、星立の旗頭は、1番旗が「東」と書かれ、2番旗が「星立」、他にとらの絵に「干立」と書かれた小旗が、世乞いの日に立てられていた。

4、おわりに

生活様式はかわっても、毎年の祭祀として盛大に行われているのは、たのもしいかぎりである。年により3日間の日時には異動はあるが、常に五穀豊穣と村落共同体の全構成員の健康であることへの感謝と願いの心を、行動で示しているのは、すばらしいことである。祖納や星立の他にも、^{シイチイ}節祭を行なっているところがあるので、これからも継続してもらいたい。

祖納（西表民俗芸能保存会）と星立（星立民俗芸能保存会）は、「西表の節祭」として、1991年（平成3）2月21日付で、国指定重要無形民俗文化財として指定されて以来、ますます自信と誇りを持って、毎年の節祭を盛大に実施している。両字はウヤムラ（親村）とファームラ（子村）の関係にあり、2日目の世乞い行事と3日日の大平井・上の井での水恩感謝祭（『西表祖納・星立の節祭の芸能』）が、ほぼ同時刻からはじまるので、見学者、調査者から両方を1度に見ることのできない不便さはある。世乞いは、その日の潮の干満により、時間を設定せざるを得ない面もあるので、今年は祖納、来年は星立という計画でしか、調査は完了できないという状況である。

沖縄各地には、その地域の歴史と文化を反映する、特徴的な祭祀がある。その大半を時間をかけて見学してきたが、「西表の節祭」（指定名称）は、みごとな構成と演出でくりひろげられる祭祀といえよう。比嘉盛章氏の論文に、この祭祀は「一番盛大且つ賑やかな行事」といわしめ、喜舎場永珣氏は「絢爛たる絵巻を見るかのようであった」と目をみはらしめた、カラフルかつ勢いのある祭祀なのである。

なお、両字の各踊り等には多くの歌がうたわれているが、前述した比嘉盛章氏、喜舎場永珣氏、石垣博孝氏、西表民俗芸能保存会（那根武会長）の論文や報告書等に、くわしく紹介されているので、割愛した。1998年（平成10）10月19日から3日間と1999年（平成11）10月14日からの3日間、じっくり見せてもらい、強力なエネルギーとパワーを得たことを特記しておく。